『SNS上での誹謗中傷』～コメント欄を実名制にすべきかすべきではないか～

3年5組34番　矢野　珠梨

１．はじめに

このテーマを選んだ理由は以前、医療従事者の方々へ向けた誹謗中傷や芸能人に対する誹謗中傷をみて、なぜそんなことができるのかと疑問に思ったからです。実際に私の母の友だちが助産師さんで医療従事者に対する批判メッセージを見て悲しい思いをしたと聞きました。特にその子供に対して「幼稚園や学校に来るな」といった言葉にとても傷ついたと言っていたというのを聞いて、なぜ最前線で働いてくれている医療従事者に対してそんなことを言えるのかと疑問に思ったし、誹謗中傷によって自ら命を落としてしまったという人もいるのになぜ件数は減っていかないのかと思ったからです。

また、リアリティ番組の出演者がSNSで多数の誹謗中傷を受けて亡くなった事件などをきっかけに、インターネット上の誹謗中傷が改めて深刻な問題として広く意識されるようになり、誹謗中傷対策の強化を求める世論が高まったことを背景に誹謗中傷対策のための立法や政策が進展してきました。しかし、この問題を完全になくすことはできていません。

これらのことから、SNS上の誹謗中傷がなくならない理由について自分なりに考えてみました。インターネットはまだ匿名性が主流であることや個人の表現の自由や批判との線引きが難しいこと、そして書き込みをしている人たちには、人を傷つけているという認識がないのではないかと考えました。今後、誹謗中傷を受けて苦しむ人の数を減少させるために私たちにはどんな対策ができるのか、などの探究を深めていきたいと思い、このテーマを選びました。

２．序論

誹謗中傷とは、根拠のない悪口や嫌がらせで他人を傷つけることである。(出典:広辞苑第7版)「誹謗」他人を悪くいうこと、「中傷」根拠のないことを言いふらし、他人の名誉を傷つけることをあわせた言葉でありSNSや掲示板などネット上の書き込みは匿名で誰でも気軽に意見を書き込むことができるため多くの人が相手の気持ちを考えず、軽い気持ちで一方的に誹謗中傷のような言葉を投稿してしまうことが多いだろう。

誹謗中傷という言葉は法律上の用語ではなく、一般的に用いられる言葉である。悪口、嫌がらせ、なりすまし、法律上の不法行為（権利侵害）、犯罪行為などのさまざまなケースが誹謗中傷には含まれ、一般的に人や企業に対して不快な思いや恐怖心をもたらすものはすべて誹謗中傷と捉えられている。最近では、YouTubeやTikTokの動画、Twitterのコメントでの誹謗中傷が目立っている。

私は、これらのことから「SNS上でのコメントを実名制にするべきか、すべきではないか」という問いを設定した。

私は、この問いに対する答えとして、実名制にすべきだと考えた。まず、なぜこの問いを考えたのかを説明すると、もしインターネットでコメントする際に実名制だと匿名制の時より、もっと自分の意見に対して責任を持てるようになるのではないのかと考えたからだ。もちろん、匿名制でも実名制でもメリットやデメリットが沢山あるだろう。どちらにすることが正解なのかは意見が分かれるが、匿名で好き放題にコメントを書き込むことができることによって、ネットトラブルが発生してると思うので、匿名制を廃止してみることも誹謗中傷を減らす一つの解決策ではないかと考えた。

SNS上で一度、誹謗中傷されてしまった人は心に傷を負い、一生忘れられない出来事になるかもしれないのに、誹謗中傷をした人は、お金を払ったりするだけで許されるのはおかしいのではないだろうか。

この問いを明らかにするために、「韓国におけるインターネット実名制の施行と効果」と「インターネットにおける匿名性はいかに正当化されるか?」という論文から得た情報を分析しインターネットを実名制にすべきかすべきではないかを考察した。

３．本論

誹謗中傷と批判の違いは線引きが難しい。批判は、ある意見や主張について欠点を指摘するなどした上で検討を加えて判定・評価することである。相手の意見や主張を尊重した上で論じるという点に注目すれば、事実でないことを根拠に悪口を言いふらす行為とは全く別のものだ。自分では、批判しているつもりでも、内容や口調によっては誹謗中傷になってしまうこともあるので、注意する必要がある。SNS上の誹謗中傷は、単に個人を不快な思いにさせるだけではなく、法規範に触れる犯罪行為になることがある。SNS上で誹謗中傷をしたことにより、法的措置で身バレしたり、逮捕されたり、高い賠償を払うことになったという事例もあるそうだ。YouTubeやTikTokなどのコメント欄に誰かが嫌な思いをするコメントをしなければ、動画の投稿者も他の視聴者もみんなが気持ちよく利用できるはずなのに、なぜ、人を傷つけるようなコメントをわざわざ残していくのかと疑問に思った。

先行研究として、私は誹謗中傷をする人の心理と今の状況について調べた。
まず、朝日新聞のアンケートの結果についてまとめた。
一つ目の「あなたはネット上で誹謗中傷を受けた経験がありますか？」という質問に対して、「受けたことがある」という人は44.6%で「受けたことがない」という人が55.4%であっな。これらの結果から、Twitterでなりすまし被害を受けた人や、不快なコメントを投稿された人が多いことが分かりました。最後に、「ネット上の誹謗中傷に対し、あなたは規制や対策の強化は必要だと思いますか？」という質問に対し、「絶対に必要だ」と答えた人は38.6%、「どちらかといえば必要だ」と答えた人が26.0%という結果が出た。半分以上の人が対策の強化が必要だと考えていることが分かった。だからこそ、もっと重い罪をつくる必要があるだろう。

次に誹謗中傷をする人の心理について調べた。なぜこれを調べたのかというと、正直、私はSNSで誹謗中傷のコメントを書く人の意味が理解できない。自分が思うだけで踏みとどまれば、こんな問題は今、問題視されていないはずなのに、少数の人が相手を傷つけるコメントをわざわざ打ち込みその人に嫌な思いをさせる。という行為をする意味が考えられなかった。そこで誹謗中傷をする人はどのような思いでやっているのかを知りたいと思った。

私は身近な人に「書き込む人の心理はどのようなものか？」というアンケートをした。調査対象は、高校生から80代まで。その結果、高校生の意見として1番多かったのが、嫉妬、羨ましさで、2番目に多かったのは、軽い気持ちによるもの、3番目に多かったのは、ストレス発散のためであると言う意見がでた。大人に意見を聞いてみると、やはり、相手に対する嫉妬から始まる誹謗中傷が多く、人を攻撃して、自分を正当化したいからと言う意見や、意味なくしているのではないかと言う意見があった。

他にも、自分の意見に共感して欲しい、自分の発言が悪いと思っていないのではないか、という意見が出ました。アンケートの結果、やはり嫉妬心や、匿名であるという安心感によって、誹謗中傷のような書き込みをしてしまうのではないかと考えた。
他人を見て、「あの人は人気がある」「私よりも〇〇ができる」など、うらやましく思ったことが誰にでも一度はあるだろう。自分よりも他人のほうが優れて見えて落ち込んだりすることはありませんか？この気持ちは誰もが持っているものだと思う。しかし、その嫉妬心を人にぶつけて心ない言葉を使い相手を攻撃することはダメだと思った。

いろいろなサイトを見ていると、誹謗中傷をする人の特徴は、主に4つあることが分かりました。
一つ目の特徴は、自分にコンプレックスを抱えていて嫉妬心が強い人である。自分の容姿や学力、経済力、運動能力などが他人と比較して劣っていると感じることは誰にでもあると思います。自らの部分的な劣等感を受け入れつつも、それ以外の分野における強みを見出し磨きをかけることで劣等と感じる部分を補う行動をとる人がいる一方で、自らの劣等感と向き合うことができず、優れていると感じる他人を妬み、その人の弱みや欠点を粗探しして自分を慰めようとする人がいる。二つ目の特徴は、歪んだ正義感を正しいと思い込んでいる人だ。コロナ禍になった頃、他府県ナンバーの車両を破壊したり、感染者を探し出して特定しら世間に氏名や住所を公表した人がいたりと、自分が悪と思っている人を退治するためなら、どのような手段を講じても構わないと信じて疑わないため、自分自身が重大な法律違反を起こしているといった自覚が全くない人のことである。これは、まさに『誹謗中傷する人』の典型例だ。三つ目の特徴は、自分のほうが相手よりも優位だと思いたいという人だ。物や人の間違いを指摘して、自分がいかに正しいかを周りに示し、その間違いを見つけた自分は優れており、認められるべきだという思考は『誹謗中傷する人』によく見られる特徴である。四つ目の特徴は、相手の反応を見るなど、行為を楽しんでいる人です。誹謗中傷は一度すると、ある種の快楽や興奮を感じることが多く、罪に対して罪悪感が薄い人が多い。そのため、そういった行為を自らの判断でやめる可能性は非常に低く、逆にその行為をエスカレートさせてしまうことがある。つまり、個人レベルで誹謗中傷行為をやめようとすることは難しく、今後新たな制度や法律などを制定する必要があると考えた。

これらの問題を解決するために、世界で初めて韓国でインターネットの実名制が導入されることになった。
韓国ではインターネット上での攻撃的な言語表現や誹謗、悪口、虚偽事実の公開、いわゆるサイバー暴力問題を懸念する声が高く、中でも悪意のあるコメントの流出などが社会問題として登場した。敵意に満ちたコメントによる被害は、著名人や芸能人のように世間っに広く認知されている人に加えて、一般人にまで及ぶなど、事態は深刻さを増している。
さらに、インターネット上で特定人物の個人情報が暴かれて当事者の実生活が脅かされるなど、プライバシーの侵害に関わる問題に対しても懸念が高まっている。
インターネット上で発生した一連の出来事が世間を騒がせるなど社会問題化したことをきっかけに、韓国では、一般掲示板の実名制（制限的本人確認制）が導入されることになった。
この制度を簡潔に説明すると、インターネット上のコミュニケーション環境における匿名性が人々の倫理意識を薄め、反社会的な行為を助長するという認識に基づき、特定のインター

ネットサービスを利用する際、実名確認の手続きを受けた人のみが書き込みできるようにする制度のことである。

インターネット実名制の施行後、韓国におけるインターネット空間にどのような変化が生じているのかを検討するため、ポータルサイトDAUM が提供するニュースに付けられたコメント数の推移を分析すると、コメント数は、制限的本人確認制の施行直後と長期的な期間において減少していることが明らかになった。しかし、会員登録をしてログインしないとコメントができないサイトで、ログインして追跡されることを知っていながら、悪質な書き込みを堂々とするユーザーが多く、お手上げ状態になってしまったそうだ。

これらのコメントを取り締まるため、コメントを書き込むときに、もう一度本人確認する「制限的本人確認制」が7月に導入された。利用者保護および個人情報保護強化のために改正された「情報通信網利用促進および情報保護などに関する法律」によりインターネット利用者が掲示板に書き込みをする時、ユーザーが本人であることをサービス運営事業者が認証しなければならない制度のことである。

これは会員登録の際に本人認証が必要な実名制とはまた異なり、実名制度は本人を認証して会員登録し、ログインした上で、実名で書き込みをさせるけれど、制限的本人確認制では、会員登録時に本人を認証することや書き込みにログインが必要なことは実名制度と同じですが、認証さえできれば、実名ではなくIDや名無しで書き込んでも問題ないというものである。この制度が実施された日の1週間ほどは、インターネット利用者による悪質なコメントの書き込みは急激に減少したが、この制度が導入された後でも、誹謗中傷のような悪質コメントは減っていくばかりではなく、悪質な書き込みをするネットユーザーは、本人確認制を全く意識せず、これまでと変わりなく、好きなようにコメントを書き込むようになってしまった。

その他にも、表現の自由という観点からインターネット空間でのコミュニケーションを規制する政策に対する批判の声も多く廃止されることになった。

これらのことから、ネットユーザーの認識や意識が変わらない限り、法律ではどうにもならないと考えられるようになった。

私は、日本でもインターネットの実名制を一度導入してみても良いのではないかと考えた。匿名制と実名制、それぞれのメリットとデメリットを比較した。匿名制によるメリットは、個人のプライバシーを守ることができ、自由な発言ができる他、気軽にコミュニティに参加できることである。また、私が最も良いと思ったところは、匿名制にすると、立場の関係がなくみんな平等であることだ。デメリットは、匿名制であることを上手く利用し、トラブルが発生しやすいことである。最近、制度が改正され、今までよりも、情報の発信源を特定することが簡単になりましたが、少し昔は、情報発信元を特定することが難しく大変だったことが分かった。

実名制によるメリットは、自分の内容について、責任を持てること、無駄な反論をすることがなくなるのではないかということで、デメリットは、個人のプライバシーを守れないことである。

どちらにおいても、メリットとデメリットがあり、今の日本にはどちらの制度がぴったりであるのかは分からない。

４．結論

私は今回、これらのことを探究し、匿名制は、悪口を書くための制度ではないため、匿名制であることを良いように利用して、悪口を書くなら人がたくさんいるというのなら、匿名でコメントできないようにするべきだと思った。
韓国で実名制が行われたように、日本でも一度実施してみることによって、それぞれにどんな問題が起こるのかなどを実際にテストしてみたら良いと考えた。
最終的に韓国で行われた誹謗中傷の抑制効果は小さく、表現の自由を阻害するという点で廃止されてしまったため、新たな対策を立てる必要があると考えた。
私は実名制にすべきだと考えましたが、個人情報の管理の点について今後検討が必要だと思った。

５．おわりに

最後に私は、今回このテーマを探求し、snsの誹謗中傷を減らしていくためには、snsの使用方法や意味について、もう一度確認し直し、言葉の重みをしっかり考え、人に流されず、自分や相手の意志や意見を尊重し、投稿することが大切だとおもいました。
ネット上にあげてしまった言葉は、完全に消すことはほぼ不可能です。だからこそ、自分がのせた文章にもっと責任を持つべきだと思います。
また、言葉によって傷つけること、傷つけられることは、ネット上だけではありません。普段の生活でも、ふとした時に出た言葉で相手を傷つけてしまったり、自分が傷ついてしまったりすることもあります。SNSを使うことで楽しみがある一方でもちろん、苦しみもあります。だからこそ、これからは自分が投稿しようとしているその一言で傷ついてしまう人がいないかどうか、一度あげたら消せないこと、それをよく考えてから意見を発信することを心がけ、少しでも誹謗中傷によって悲しい思いをする人や、犠牲になる方の命を救うため、自分たちが出来ることを考え、少しでも誹謗中傷の件数が少なくなると良いと思いました。

６．参考文献・出典

・濱野まさひろ　「批判」と「非難」、「誹謗中傷」は違う　https://www.officeazm.jp/hihantohinan/、2021.7.26
濱野さんによると、批判は、ある意見や主張について欠点を指摘するなどした上で検討を加えて判定・評価することである。

・東京大学　柳 文珠　2013年「韓国におけるインターネット実名制の施行と効果」一般社団法人社会情報学会　第2巻1号　P.17～29

・吉備国際大学　大谷 卓史　2007年「インターネットにおける匿名性はいかに正当化されるか」　政策マネジメント学部研究紀要　第3号P.43～58